



うみ なか ま
海の仲間たち

バダーじいさんの ついてない 日

ピンポン！

「やあ、デリック。トリスタンに ^あ会いに ^き来たのかい？」
げんかんのドアを ^あ開けると、ジェイクおじいちゃんが ^い言いました。

「うん。友だちの ^{とも}シャンタルを ^いしょうかいしたいんだ。」

「中へ ^{なか}お入り。今、^{はい}トリスタンを ^{いま}よんで ^く来るからね。」
と、ジェイクおじいちゃん。

おじいちゃんは ^{かい}2階へ ^い行って、トリスタンの
^へ部屋を ^やのぞきました。「デリックが ^き来ているよ。
^{とも}友だちも いっしょだ。」

「他の ^{ほか}時に ^{とき}して もらえないかな？
^{いま}今は ^あだれにも ^あ会いたく ^いないんだ。」と、
トリスタン。



ジェイクおじいちゃんは 部屋の中に入って ドアを 閉め、
ベッドに すわりました。「何か いやな ことでも あったのかい？」

「ううん。だけど、今は 新しい 友だちには 会いたく ないんだ。」と、
トリストン。

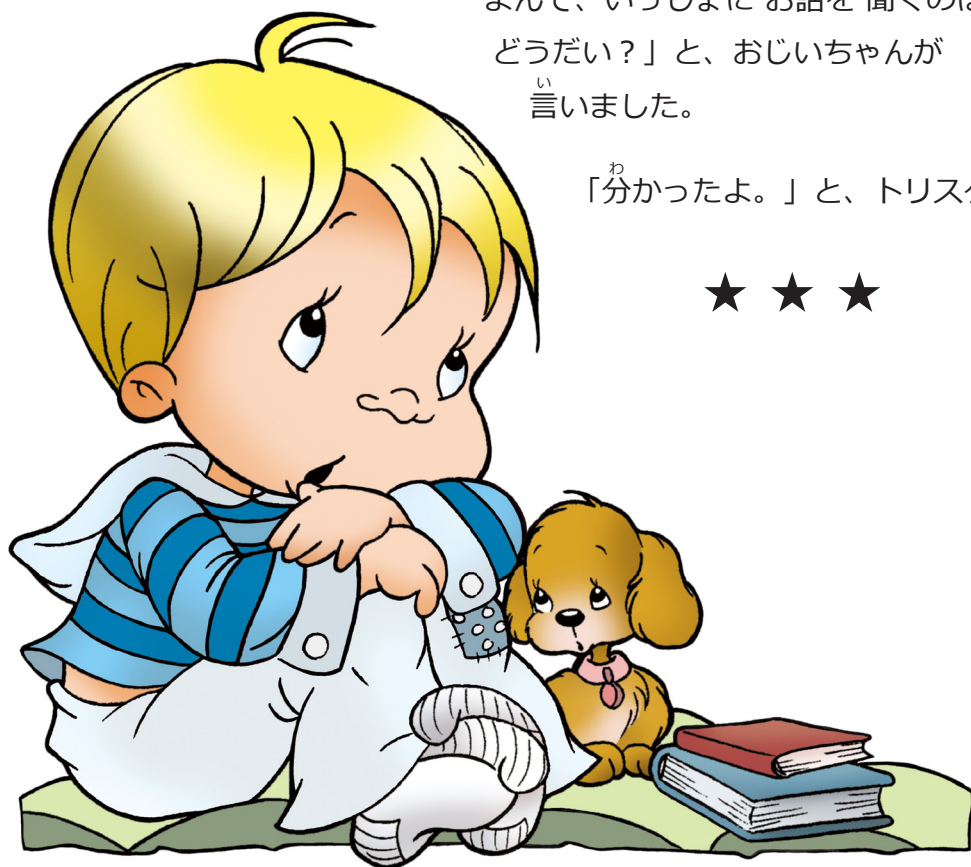
「それで、バダーじいさんについての お話を 思い出したよ。
聞きたいかい？」

「うん。」

「じゃあ、デリックと シャンタルも
よんで、いっしょに お話を 聞くのは
どうだい？」と、おじいちゃんが
言いました。

「分かったよ。」と、トリストン。

★ ★ ★



ゴビーは バダーじいさんを さがしに、真っ先に 泳いで いました。
新しく できた 人魚友だちの カミールを しょうかいしたくて



たまらないのです。カミールと
友だちに なれたのは
バダーじいさんの 助言の
おかげですから。

「バダーじいさん！」 そう
よびながら、ゴビーは サンゴしょうを
出たり 入ったり しました。
(きっと、あそこだぞ。) と、
ゴビーは 思いました。

ゴビーの ^{おも}思った通り、バダーじいさんはサンゴしょうのおくの ^{ほう}方にいました。何だか ^{なん}ごきげんななめのようです。

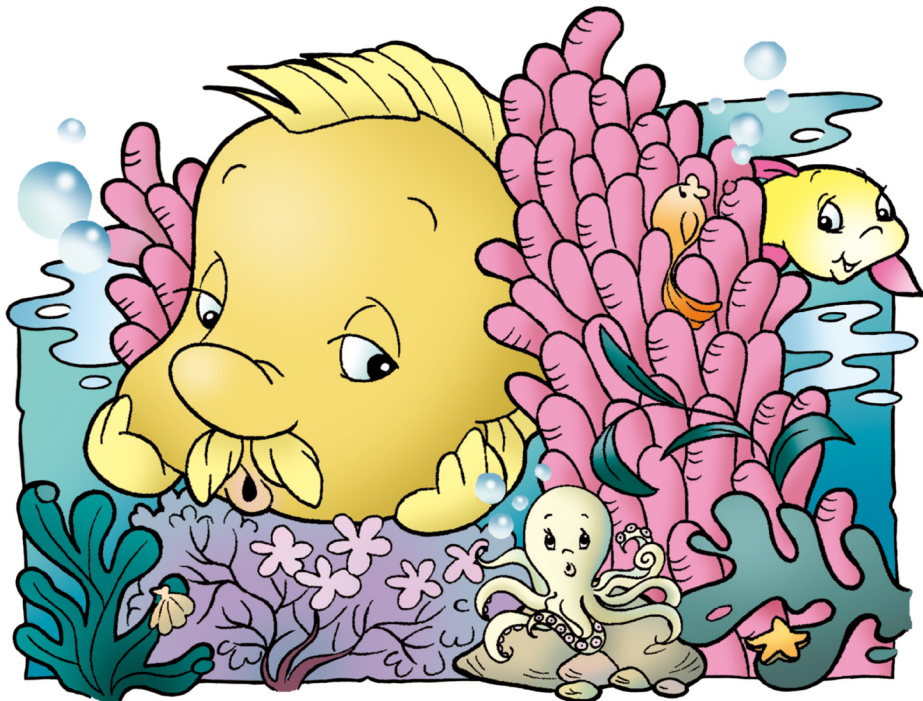
「^み見つけた！ ^{こえ}ずっと、さがしていたんですよ。」ゴビーが ^あ声を上げました。

「どうしてわしをさがしてたんだい？」バダーじいさんがふきげんそうにたずねました。

「カミールを ^{おも}しょうかいしたいと思って。この前 ^{まえ} ^あ会った ^{にんぎょ}人魚のカミールです。」と、ゴビーが ^{こた}答えました。

「^{いま}今は ^{ひとり}一人にしておいてほしいんだが。」と、バダーじいさん。

「どうかしたんですか？」と、ゴビーがたずねました。



「いいや！
^いさっきも言った
じゃろ・・・」

「ゴビー！ ゴビー！
どこにいるの？」
カミールの ^{こえ}よぶ声がします。

バダーじいさんは ^{いき}ため息を
つきました。

すると、バダーじいさんがいた
サンゴの ^む向こう側から、^{がわ}2つの ^{ふた}目が
のぞきました。「あら、こんにちは！
かくれているの？」カミールが
^{よう}陽気に ^き声を ^{こえ}かけました。



「^{なん}何で ^{ところ}こんな ^{かのじょ}所まで ^{彼女を}彼女を
^つ連れて ^き来たんだい？」 まゆを ひそめ、
いらいらしながら、バダーじいさんが
ゴビーに ささやきました。

「ごめんなさい。ぼくの ^{あと}後について ^き来てたんだ。」と、
ゴビー。

カミールは バダーじいさんの そばまで ^{およ}泳いで ^く来ると、
にっこりして ^い言いました。「あなたが バダーじいさんね？」

「そういう ことじゃ。」 バダーじいさんは ボソボソと
^い言いました。

「^{はじめ}初めまして！ ^{かい}きれいな ^み貝を ^み見つけたんです。どうぞ。」
カミールが ^{した}親しげに ^{はな}話しかけました。

フグの バダーじいさんは、だまった ままです。

「^{ほか}他の ^{とき}時に しようよ。
バダーじいさんは、^{いま}今は ^{ひとり}一人で
いたいんだって。」と、ゴビー。

「まあ、^{なに}何か ^{かな}悲しい ことでも あったん
ですか？」 カミールは バダーじいさんの ^{ほう}方に
^{かえ}ふり返って ^い言いました。

「^{いったい}一体 ^{なん}何で ^{なに}みんなは、^{ちんだい}わしに ^{おち}何か ^{問題でも}問題でも あると ^{おも}思うのかい？
ただ ^{ほお}放って おいて ^{ほしい}ほしい だけなんじゃ！」 バダーじいさんは
おこったように ^い言いました。

ぷんと しながら、バダーじいさんは だまって しまいました。

ゴビーが カミールの ^{ほう}方を見ると、カミールは ^{かたを}かたを すくめ
ました。2人は バダーじいさんが ^{ふさいで}ふさいで いるので、^{なん}何とか ^{げん}元気
づけて ^{おち}あげたいと ^{おも}思ったのですが、どうしたら いいのでしょうか？

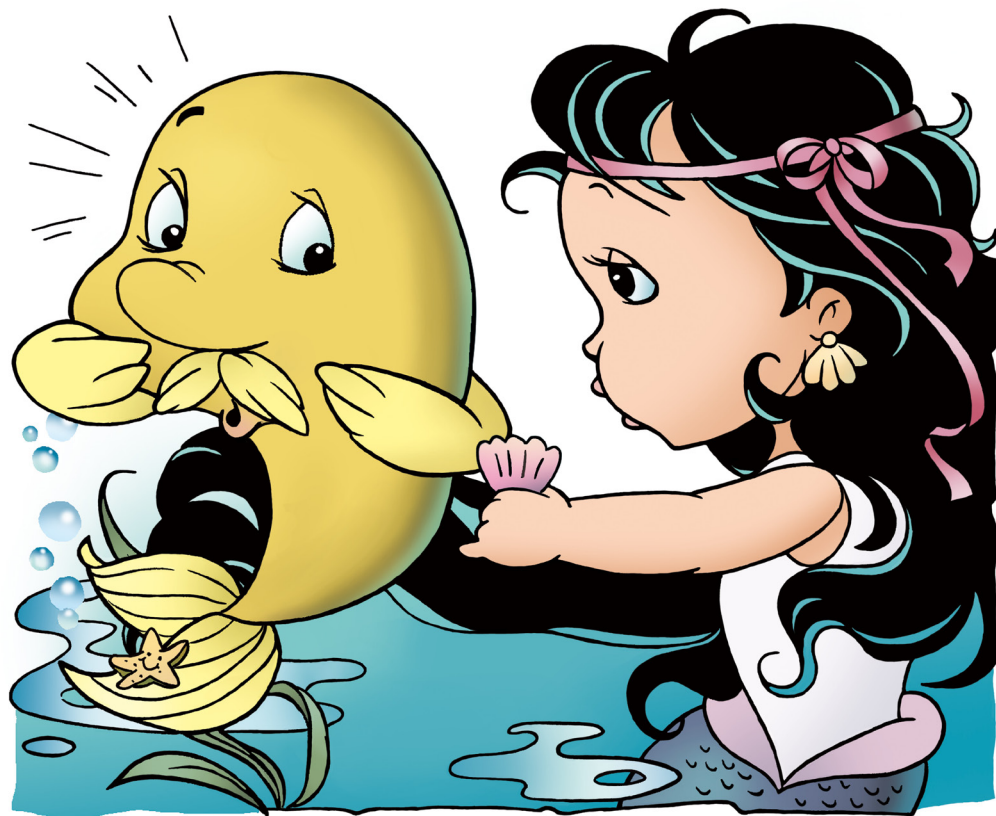
バダーじいさんは少し^{すこ} 体^{からだ}を よじって 言^いいました。「すまないね。
別に^{べつ}、悪気^{わる ぎ}は ないんじゃ。ただ、今日^{きょう}は ついて なくてな。いらいらして
おるんじゃよ。」

「わたしにも、そういう ことは あるわ。」と、カミール。

「どうやって きげんを^{なお} 直すのかい？」 バダーじいさんが
たずねました。

「お父^{とう}さんが、元^{げん}気^きに なる 詩^しを 教^{おし}えて くれたの。いやな ことが
あるたび^{あんしょう}に 暗唱^{あんしょう}しなさいって。そうすれば、元^{げん}気^きに になれるよって。」

カミールが その 詩^しを 暗唱^{あんしょう}しました。



「気分^{きぶん}が めいっている 時^{とき}は、わたしが
受^うけている 愛^{あい}の 数々^{かずかず}を
思^{おも}い出^だすの。」

人^{じんせい}生^{せい}の 良^よき ものを
数^{かぞ}え上^あげると、本^{ほん}当^{とう}に
そ^その 通^{とお}りの 幸^{しあわ}せに
なれるのよ！」





「すてきな 詩だね。」と、ゴビー。

「それで、うまく いくのかね？」
バダーじいさんが たずねました。

「ええ。思いつく限りの 良い ものを
思い出すの。やっ て みませんか？」と、カミール。

「分かったよ。どう やるんだい？」

「じゃあ、わたしから 始めるわね。海の
水が さわやかで、すごく うれしいわ。」と、
カミール。「じゃ、次はゴビーの 番よ。」

「ぼくは、美しい サンゴしょうの 中で
くらせるのが うれしい。」と、ゴビー。

次は バダーじいさんの 番です。「ふ〜む……。
わたしは、サンゴしょうの 中にお気に入りの
かくれ場所があるのが うれしいわい。」

1周 回って、また カミールの番です。
「わたしを 愛してくれる 人たちの ことを
考えると、すごく 幸せになるの。」

「ぼくも、毎日を すごく 楽しく してくれる
友だちが いて、うれしいよ。」と、ゴビーも
言いました。

すると、バダーじいさんも 照れくさそうに
言いました。「新しい 友だちが できるのは、
いいものじゃ。わたしを 元気づけて くれて、
ありがとうよ。今日は 全く ついてない
日だったが、良い ことについて
考えたら、気分が ずっと
良くなったよ。」

「ぼくも。」と、ゴビー。



カミールは にっこり しました。

「^{げん き}元気に なって、^{ほんとう よ}本当に 良かったわ。わたし、^{まわ ひと}周りの 人たちに
^{よろこ}喜んで もらえるのが うれしいの！」

バダーじいさんが ^い言いました。「そうだ。あまり ^{とお}遠く ^{ところ}ない 所に、
^{ちんぼつせん}沈没船が あるんだが、^{たんけん い}探検に 行かないかね？」

「まあ、^{たの}楽しそう。」と、カミールが ^い言いました。

それで、いっしょに ^{たの}楽しい ^{ふね}船の ^{たんけん}探検に ^で出かけて
行きました。でも、みんなが ^{いちばん}一番 うれしかったのは、
^{とも}友だちに なれた ことでした。



「^{にんぎょ}人魚の ^{はなし}お話、^{たの}楽しかったわ。」
ジェイクおじいちゃんが ^{ほん}本を ^と閉じると、
シャンタルが ^い言いました。

「ジェイクおじいちゃんは、
^{たの}楽しい ^{はなし}お話を いっぱい
してくれるんだ。」と、
デリック。



「お母さんが、ジェイクおじいちゃんのお話は ^{はなし}特別^{とくべつ}なんだって。」
と、トリスタンも ^い言いました。

「どうして ^{とくべつ}特別なのか、^し知っているかい？」と、
ジェイクおじいちゃんが たずねました。

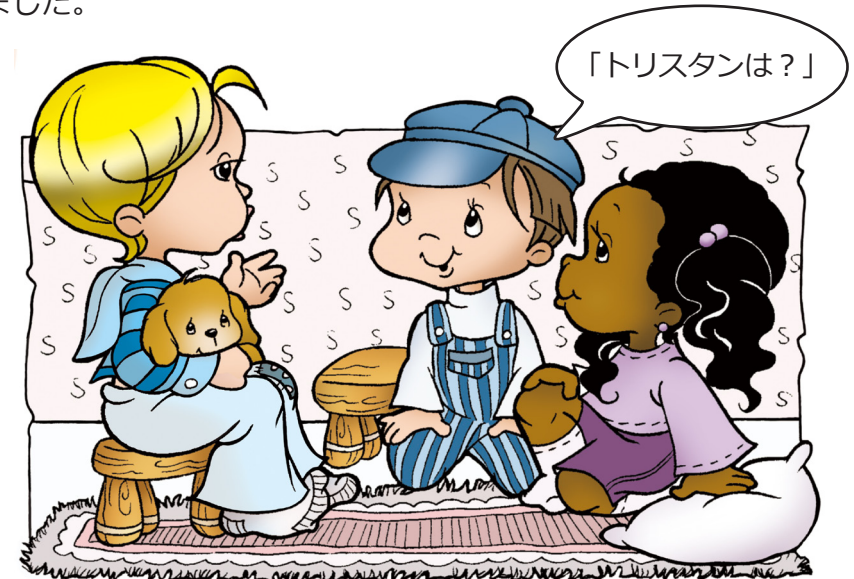
3人とも、^{くび}首を ふって「^し知らな—い！」と ^{こた}答えました。

「それはだな、この ^{はなし}お話は、^{たいせつ}大切な ^{きょうくん}教訓を ^{おし}教えて くれるから
なんじゃ。今日の ^{きょう}お話では、バダーじいさんは ^{なに}何を ^{まな}学んだかな？」

「もっと ^{かいかつ}快活に なるって ことかしら。」と、シャンタルが
^い言いました。

「デリックは どう ^{おも}思うかい？ バダーじいさんは、^{なに}何を
^{まな}学んだんだろう？」と、ジェイクおじいちゃんが たずねました。

「そんなに ふてくさらないって ことかな。」と、デリックが
^{こた}答えました。





「そうだなあ。バダーじいさんは、
 たの かんが はじ いま
 楽しい ことを 考え始めたら、今まで
 ふきげんだった 理由を わすれちゃった
 よね。そうしたら、新しい 友だちが
 できたんだよね。」と、トリスタンが
 言いました。

「みんな、いい 答えだね。と、
 ジェイクおじいちゃん。

「さっきは ふきげんで、ごめんね。」
 と、トリスタンが あやまりました。
 「友だちになれて うれしいよ、
 シャンタル。デリックが 前から
 友だちなのも、うれしいしね。」



きょうくん
 教訓：

ものごと あか めん
 物事の 明るい 面を
 み げん き だ
 見よう！ 元気を出そう。
 きみ も
 君が 持っている ものや、
 きみ あい
 君を 愛してくれている
 ひと おも だ
 人たちの ことを 思い出して
 ごらん。きっと、幸せに
 かん
 感じるよ。